室生犀星
外村繁
集

現代文学大系　30

筑摩書房

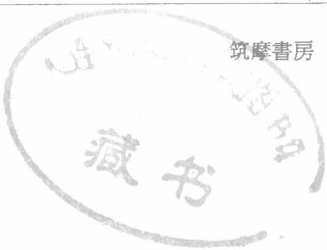
182954

日文 701637004

室生犀星
外村繁
集

現代文学大系 30

筑摩書房



918
G34

現代文学大系30　室生犀星　外村繁集
昭和四十年八月十日発行
著者　室生犀星　外村繁
発行者　古田晁
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三
装幀　真鍋博
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　和田製本工業株式会社

受入
40.12.-7
埼玉県立図書館

室生犀星集　目　次

かげろふの日記遺文　五 103
性に眼覚める頃　一〇八 37
美しき氷河　一四五 18
香炉を盗む　一六三 18
あにいもうと　一八一 14
蝶　一九五 19
はるあはれ　二一四 17
抒情小曲集　二二一 38
随筆　女ひと（抄）　二六九 0
えもいはれざる人　二六九 7
為すなきことども　二七五 7
手と足について　二八二 7
童　貞　二八九 7
二の腕の美しさ　二九六

外村　繁集　目　次

澪　標　三〇一
最上川　四一五
鵜の物語　三七三
落日の光景　四三五
夢幻泡影　四〇二

年譜　四四
人と文学　奥野健男　四七〇
口絵写真撮影（外村繁）　畔田藤治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

室生犀星集

元日や　銭を思へば　はるかなる

犀星

かげろふの日記遺文

一、花やぐひと

彼女の人眼を惹いてゐるわけは、見るとすぐにひやりとさせる顔の冷たい美しさであつた。それにも増して何時も容易には笑はない子で、ただ、眼をチラつかせるだけで、それで言葉のかはりになり、笑ひの意味をも、つたへた。品とか位とかいふものを生れながらに持つた女と見てよい、品と位のある顔はもう十七歳になつてゐても、こぼれる色気を斥けてゐると言つてよかつた。雪のふる日にも簾をあげて庭を見守る日常には、その景色に相応しい顔だちと見るほかはなかつた。余りに品の隆い顔といふものには、人の心を容れないあざけりが含まれてゐる、かうがうしいといふ感覚には抒情が乏しいものなのだ。

かげろふ日記の筆者である紫苑の上は、天暦七年には十八歳になつてゐたが、つやつやしい皮膚の明りはもつてゐたけれど、高慢とも、あざけりとも見えるかほつきは深まる一方で、それは消えがたいものになつてゐた。これが平安のたをやめの一条件どころか、姫達の顔にさういふ弾くたかぶりを見ることが、色ごのみの喜ぶいかつさであつた。もつとも美しいものにその反対の厳格がほしかつたし、それを踏み越える惨酷をかれらは競うて眺めた。そんな意味で紫苑は人の眼を惹いてゐたし、男に飢ゑを与へた。幼少の頃からあまかづら（甘味）を舐めるのにも、紫苑は誰知らぬ間にそれを舐め、湯あみするときにも乳人に、からだを隙見はさせなかつた。自然なおこなひに不自然に成長してゆく自分を、遠いものに見てゐたかつた。女である初見の日はこの若い姫の眼に、けがらはしさを自らに省みたほどであつた。なにゆゑにさうならなければならないかが、紫苑をくるしめた。矜持とか見識、護り、身分といふものとは別個なこのいぎなひを、女はなぜに避けられぬかも或る日の永い不快さだつた。彼女は築山とか池とかの、諸々の草木を眺める間にも、その日の眼のけがれを感じた程だ、それも十八歳では次第に慣れては来た思ひだつたが、白綾の襲を着ぬ日は欝陶しく、忌みきらふ日のうちでも、この日のつづくことは、木々の上にも、人のけがれを蔽ふやうなとがめを感じた。

或る夜、紫苑はこの事を乳人に打開けようか、それとも以前のままで過ごして置かうかと、その夜もまどひ続けた。それは両の乳房の尖端にこりこりが出来、乳房のみねにしこりとなつて、だいぶ前から現はれて来たものであつた。女身といふものは何事も犯さずに温和しくしてゐても、或

るいまはしい事がらを仄かに考へてみた後には、からだに異常が顕現するものだといふ覚えるともない覚えが、紫苑に乳房の忌はしいしこりをあらはして来たことで、顔色をあをざめさせた。処女といふものはその考へにすら、迂濶に男の性を介入させてはならぬものだといふ教へが、怖れとなつた。だから、紫苑は手で肉体のいづくにもさはることを平常もしてゐないし、肉体が目にたわわになることが気になつてゐた。ことさらに乳房にさはることは避けてゐたが、気のせゐか、さはれば遠い痛みがあつた。この痛みはそのまま打棄つて置くわけにはいかぬ気がし、乳人にけふ話をしようか明日聞いて貰ふかにあせつた。

或る夜、着替への折、紫苑は乳人の手を自分の乳房に持つてゆき、これを、と言つた。乳人は乳房のしこりをさぐり、そして痛むかどうかと問ねたが、紫苑はいまは疼んでは居ぬと答へた。翌日、あかるい日の中で紫苑はあからさまに、乳人に見てもらつた。そして乳人はさはらずにその儘にして置くことに注意していつた。

「これは若い内によくあることで、そのままでいらつしやれば何時の間にか、なくなつてゆく一時のあらはれにすぎませぬ。女が女として見られるまでには種々なからだの堰がございます。堰はたいせつに守つてやらねばなりませぬ。」

乳人は何時も紫苑から反射されたまじめくさつた顔付で、お美事なお乳ぶさで何時でも御乳が事あれば、ほとばしる時がやがてはございませうと言つたが、紫苑は心からいやな顔をし、紅梅襲を引き合せて匿してしまつた。からかはれた気がして見せなければ宜かつたと思つた。それに、もひとつは乳人が着替へを頻繁にさせることが物悒く、そのままにしてたもれと言ひ続けても、烈しい若さの発散物はあま酸つぱく、かなしいよごれとなり襟の錦をくもらせた。彼女は焚きこむ香の間に、みづからの肌の匂ひをかぎ分けることでは、殆ど束の間のあひだに、かぎ当てることができた。

十八歳の深秋、はじめて紫苑は乱調の長歌を作つた。どうにも、父、藤原倫寧にもはなされないし、乳人にも、召仕達にも打開けても判らないもやもやにおそはれた。腹が立つ怒りにも似て、それとは、くらべられぬ物悲しさであつた。自らのために生きるのか、父倫寧に安堵させる成人の美しさに辿りつくためか、一さい生きることの目標をはつきり見定めたい気持のいら立たしさであつた。「何しかは生きてこれの身を、うるはしと褒めもほりけれ、白きはてなきわが身の山にもかけて、そだち到きぬ。人の身の山かけ草かけがよふは、をみなごのそは何のことがら、母にいらへ求むることにあらず、またよそ人に尋ぬることにもあらざれば、われは見ぬ、山かけてかがやく身の大きさ、うるはしとのみ言ふは愚かよ、花つくるは草木のみにあらざれ、わが身の今宵の照りは湯づとみ（沐浴）にあふれて、月悲しそなたにも似て。」

紫苑は書き終へて羞かしさに簾の外をうかがひ、再読して顔をあからめた。どうして斯様に、あらはな事をかき記したかと、にはかに、紙をまるめてしまつた。筆とれば思ふままの振舞ひが書き分けられ、たうてい口にすることも出来ない恥かしさも、すらすらと書き述べられることの奇異と面白さに、紙苑はべつの紙をまたひろげて思ひの襞をしらべた。書くといふことは心のままになることであり、書かれたことに対ふことの親しさは、自分といふ者のありかを確かりと摑まへられる気になることであつた。いま一つ紫苑にあたへた異感の動きは、仕への者の立居にも、朝夕の簀の子の景色、草木もいままでより媚びた明色に映り、とりわけ青い薄葉をのべた机のおもむきある紫苑の正座までが、後の世につながる思ひであつた。書くといふことの嬉しさの果に紫苑は生きる自分を見ることに、疑ひを持たなくなつた。彼女は自分にいひ聞かせてみた。何でもない事共でも書き溜めて、昨日がなにの為にあつたか、明日はまた何のよすがで訪づれるかを、薄葉のうへに述べてみたかつた。薄葉はおちついて落筆を待ち、落筆は昨日よりも多くを尋ねるのである。物を書かうとする私よ、いままで何処かにかくれてゐてふいに私に溜つたものを、すくひ上げようとして来てくれたあたらしい私、私はそなたを托み、そなたは私をかい抱いてくれるやうにと、紫苑は自分を摑んだ。

父、倫寧は或る日、机に対つてゐる紫苑にその書き物をお見せといつた。多分、見せはしないであらうが、紫苑の叔母の佐野がいまからあのやうに書き物をして、殿合せも顧みないでは困ると進言したためであつた。やはり紫苑は父にかぶりを振つて紙をひらいて見せることをしなかつた。再度、倫寧はただの一枚だけでよろしい、そなたがどのあたりに筆をとどめてゐるかを知りたい、そなたも自分の文の才を確かめて置かねば、折角の書き物もむだになるではないかと言ひ、紫苑はその言葉にはじめて意味を知つた柔らいだ顔付で、一枚の薄葉をさし出した。

「私は護摩の御符を飲んでみたが、母上の仰せのやうにお腹の痛みはとまらなかつた。あのやうな細かい砂子のどこにお薬になるものが潜んでゐるのであらう。私は物忌みのない晴れた日の川原に出て、僧が砂子をすくひ甕にをさめる姿をみたことがあつた。それは貴い加持祈禱をあたへた砂子であり、服用すれば疫病も治るといふ僧の申し開きであつたが、私には何の効きめもなく、そのむなしい砂子は次ぎの服用にはもちひずに取り棄てて了つたが、貴い砂子の祟りもなければ、捨てられた砂子には青い煙も立たなかつた。却つて今になれば氷柱を舐め、雪霰を頬張つてゐたら、私の腹中も爽やかになつたかも判りませぬ。」斯様に記された言葉に倫寧は、書き物をしてから瞼上にある娘の気ぶりを、それは書き物によつて心のもゆる有様であることを知つた。そのしめくくりには、更に斯うしるされてあ

つた。「勿論、母上の仰せは仰せであるが、私の考へも考へであるとしなければならぬ。」と、添へ書きがしてあつた。

倫寧は娘の顔をけふは見直すやうに見て、物を書くといふことの恐ろしさ、書く才を眼の前に見た眩しさを抑へていつた。そなたほどの女をまだわしは見たことがない、わしがいま見たものは既くにわしの娘からはなれた一人の才媛として、花やいで見える。併しそれは花のやうにつぶれて了ふかも知れないし、才能はたちまち跡方もなく消散するかも判らぬが、これだけに盛られてゐるものがどのやうにして滅びるかが見ものであるといつた。さらに、そなたが子供の折からなかなか笑はぬ子であつたし、つめたいだけの麗質だつたが、それはそのまま鍛へられただけで、いまもさうなのである。わしは娘としてのそなたが其様に人の気をよせつけない女に、夥しい懸念を持つと言つた。

「お父上、わたくしは心で思つたことを顔に現はす体の女でございませぬ。そのために長歌を物し日記風の物語をつくるのでございませう。ものを書きはじめてから、草にも花にも、顔と顔と相触れる思ひがしてなりませぬ。つづめて申せば愉しい心のはずみを感じてゐるのです。お父上はいま少し私を当世風な眼と粧ひで、ありふれた娘としての御望みがおありでせうか。」

「わしの望みは迷うてゐる。そなたがこのままに紙と筆とを持つてゐたら、二人なき女性になり得よう、併しそれは女の倖せになるかどうかは疑はしい。」

「ではよき妻にとの御望みでいらつしやいますか。」

「父といふものの願ひもそこに落ちつくが、いまはそなたをとどめるにはわしの力倆が不足してゐるくらゐだ。」

紫苑は大勢の仕へにも、倫寧の遠慮がちなのも、母や乳人も紫苑にさはらぬやう気をつかつてゐるのが、つらかつた。妙な気おくれが表にはなかつたけれど、みんなの心に紫苑になるべく障らぬやうにしてゐるのが、余計眼立つて来たのである。

紫苑、十九歳、髪はうしろにけぶり、蒼顔はただその瞳と同様に澄んで、ふつうの姫達とは年の二つくらゐ上に見られた。当時の高貴の姫達にある共通のけんのある面持は、紫苑にあつては処女の気高さに加へて、物書くひとの怖れを拒んだ大胆な眼づかひと気ぶりがあつた。戯談とか笑ひとかを生れながらに斥けた人の、うつくしさである。さういふ女に梅の枝に歌の文を寄せ、七日あまり通ひつづける男があつても、紫苑は少しのうろたへも見せなかつた。彼女自身がそれを作りあげる訳ではないが、机をはなれて庭を眺めてゐる傍に殆ど寄りつけぬ黙示があつた。つまり何を言つても邪魔になる気はひなのだ。

その年の春の終りに、倫寧は或る日、紫苑に藤原兼家からの申入れをつたへた。兼家は右兵衛佐で右大臣師輔の三男、当時は本妻、第二夫人の併立される時代だから、時姫といふ本妻があつて一子道隆がすでに生れてゐた。

紫苑の矜持はそのやうな言葉を、父の口から聞くだけで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

も、更に高く反撥したのである。紫苑はたじろぐ父の怯えた顔色を見つめて、臆しないで言つた。

「お父上は兼家様に何とお答へあそばしました。私はそれから先にうかがひたいのでございます。」

「わしは内諾をあたへて置いた。そなたとても、そのままひとりでは居られまい。」

「兼家様には時姫といふ方がいらつしやいますことをご存じでせうに、お父上としては私の意を先づおたづね下されても宜かつた筈でした。」

「それでそなたは？」

「私はそのやうに本妻のある方には心が動きませぬ。」

父、倫寧の沈着も、澄み切つた紫苑の顔から眼を逸らせるやうに、この言葉がはたらいた。倫寧もまた正、妾の境にこの時代のしきたりの痴情をこばみ得ぬ人だつた。父をあがめてゐた紫苑がこれらの情景の中に、父を見、父を感じ、その教養を併せてかんがへることが、くるほしいものであつた。父もやはり男といふもの、男の持つ一さいを備へてゐる人としての考へ方は、紫苑には、何時もそれを取り除きたいいやなものであつた。

紫苑の考へは無理にも、男でない父、いまの世上の男達の持つ放埒をもたぬ父としての見方を持ちたかつた。だから、けふ兼家の求婚の話が持ち出された時の、父、倫寧のいひやうのない眼に見たことのない極りの悪さ、娘といふものに平然と暗い波をかぶせることをすすめる倫寧を、父でない別状の人のやうに思へた。紫苑はふだん父の匂ひをかぐことがきらひであつた。母には乳の匂ひがあつて愉しかつたが、父には乳に似た匂ひはなく、厳格な隆い叡智のけはひにごつごつした崖のやうな匂ひが、紫苑に父といふものの匂ひであつたことが、ひそかに嫌はれてゐた。それにも増して紫苑はさらに細かい眼で、父の胸とか手とかを見て、世上の男といふものを引つくるめて見なければならぬことを、何時も恥ぢた。父の沐浴の折に行きあはせた時は、紫苑の驚きはちひさい叫びごゑと、むねには鼓動を感じたくらゐだつた。娘といふものは露はな父のからだを見てはならないものだ。それを見たときには眼は洗はなければならず、心に永くとどめて居てはならぬものであつた。紫苑はまた何かの弾みに若い仕丁が井のほとりで、からだを拭いてゐるすがたを見たとき、甚だしい羞かしさをおぼえた。しかも、それらの世界がいちど眼にはいると脱けることを知らないで、永くおぼえてゐることが更に忌はしかつた。

だから紫苑は自分のからだのどの部分にも、寝所にはいるとそれに触れぬやう、手はしとねのうへに重ねて寝てゐた。母からの教へもあつたが、十九歳の紫苑のまもることは、夜は手をからだから外して寝ることであつた。そのやうにして寝ることの憚りのない慎みは、夜半は眼ざめてからだの両脇に置かれた手の安泰をおぼえると、なによりも正しい恥ぢない嬉しさを感じた。今宵も私はよい寝姿をそ

なへてゐたといふ歓びは、紫苑の純潔をきづいた。

或る秋づいた夜のあさい時刻、突然、門の前に騎馬のけはひがして、入り乱れて戸を叩く供のある者がゐた。紫苑の寝所にもその物音が聴え、邸内の仕への女達がその騒ぎにみな表がかりに出て、様子をうかがつた。召仕達が紫苑につたへて、藤原兼家が正式に求婚する使者であることが判つた。何方にしてもお文をいただく由がないとつつばねても、使ひの武官はもう邸の内に馬を乗り入れ、供の者はこんどはひつそりと植込みに集まつた。

供の者の差し出す文章は、にはかに思ひついて書いた物らしく、粗い紙に、兼家の能筆にもかかはらない、禿びた筆蹟で、認められてあつた。紫苑はただそれを例のつべたい思ひで、読んだ、みんなの騒ぐ中でこのやうなおちつきを見せる紫苑が、どう答へするかと仕への人々は見守つた。勿論、紫苑は返しを書く気がしないといひ、倫寧の妻はそれだけはお答へあれと何度もつたへた。文章の内容は、「音にのみ聞けば悲しな郭公ことかたらはんと思ふ心あり」とあるだけで、紫苑は返しを書かぬといひ、その答へを待つ門内外のざわめきに、仕への者らが加へて騒ぐのが止まなかつた。

語らはん人なき里にほととぎす
甲斐なかるべき声なふるしそ

「私はお話の対手になるやうな者ではございません、再度と手紙なぞ下さらないやうに」と書いて、紫苑はきふに自分のまはりが踏みにじられてゐる気がした。間もなく武官の供が去つた後、その後刻のわびしさと腹立たしさで、はじめて睡りがさまたげられ、明け方近く、すでにおうしいつくしの鳴く声を、森のあたりからくるのを聞いた。

このきつかけでは、兼家のたびたびの恋歌となり、紫苑は時たま、それの返しを書いた。父、倫寧の眼はただそれを眺めてゐるだけであつた。あれだけの紫苑が返歌をおくるといふことに、倫寧はやはりそこに女の生き身を見るやうになつた。

「鹿の音もきこえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな」といふ兼家に、紫苑はつい「貴方は鹿がならび鳴く高砂の尾のへにいらつしやつても、お目がさめていらつしやる風とも聞いてゐませぬのに、――お寝みになれないなどと承はることは、ありさうもないことに思はれます。」

紫苑はこの返しを書いてから、しげしげと兼家の文が来て、それをいちいち返してゐた。その時紫苑の気づいたことは今まで書きつらねた文の冴え、習ひ、勉めの悉くが兼家におくる文のちからとなつてゐることであり、今までの様に漠然と文を練るために机に靠ることがまれになつた。私はかはりかけてゐると気がつきはじめた。いままでに作り上げた矜があともなく洗はれ、別の紫苑といふ女が現は

れはじめたのだ。斯様に兼家の文を返してゐる自分に気づいた時はもはや晩い、そのことで厚顔な一介の男としての兼家は、ただ、紫苑を自分のものにするために、突きすすんで来て退くことを知らなかつたし、それを受ける紫苑はなんのふせぎも持たず、また経験といふものから教へられることはなかつた。処女といふものの脆い危なさ、高い矜もくづれやすいのは、悉くの純潔といふ油断がちの隙間があるためであつた。

この夜は邸の中に、ことさらに物音が絶え、紫苑はむねに軽い虫知らせが感じられた。贈答歌の折りかさなりが宵の程から、女の身を持つための居ぐるしさが騒ぎ、一方には今までつくり上げた紫苑の冷たい矜が、兼家にこころ添はぬものを用意してゐた。あのやうに時姫といふ人をそばに寄せつけてゐる兼家に、私としたことがこの胸さわぎはどうしたものであらうと、紫苑は生き身といふものが心の高さとは別様なはたらきを見せてゐる自分を感じた。肉体は熱く反省は冷却してゐたが、物音のない邸の中に衣裳のすれあふそれを、気のついた時には几帳の近くにさやさやいふのを聴きいつた。

紫苑は身をちぢめ、ふるへてゐた。そこには紫苑自身がいままでに覚えたこともない顫へが、言葉をもぎ取り、身を建て直す余裕すらあたへなかつた。ただ、そこに紫苑の頭にくり返されて来たことは、何事かが起りかかつてゐてそれに自分が惹きこまれてゐるのに、それから身を退くことの出来ない境にゐることであつた。みじかいその時間に父倫寧の顔がよぎり、母や乳人や仕への女達の眼が見えて来て、それもすぐ消え去ることであつた。何たる酷い孤独がたとへやうもなく紫苑をいぢめ抜いてゐることだらう、顫へは全身にあらいなみとなり、もはや細かい顫へは失はれつつあつた。紫苑はこの孤独のさかひから早くつれ出してもらはなければ、顫へのとまる処に往かなければならないものを求めた。自分のきぬずれのさやめきがまるで、邸中にひろがる大きい音いろに聴えた。

生ぬるい兼家の手が、ふるへる紫苑の手のうへにかさねられた。あなたにここでお目にかかれたことは、遠い世からの約をふんでゐるとしか思へません、遠い世にあなたと私の名がしるされてゐる処があつて、それをけふ尋ねて参つたのです。恰度、人のゐない処に鏡のやうなものがあつて、そこにあなたの名をつきつめて参つたはずみに、いまあなたを見たのですと、兼家の言葉が耳もとを過ぎた。紫苑はまだ答へることが出来ずに、兼家の次ぎの言葉を待つた。あなたがお許しくだされることもお父上がとうに、ごぞんじの筈ですと兼家はいつた。そして紫苑がやつと返したことばはただ、顫へるばかりの僅かなしぐさだつた。紫苑は自分のちひさい事、怯えてなにもいへない自身がかうも弱よわしいものであることを、恐ろしく思つた。

夜が明けきらない前に、兼家は去つた。

紫苑はやつと、かりそめになされたことではございますまいと言ひ、兼家はいのちに代へても、かるはずみではないと誓ひ言をふくめて言つた。明け方の鋭い空の切れ方が、庭一杯にみなぎり、あまりに変りはてた景色の異様な美しさに、紫苑はみぶるひをし、肌を透く明りを羞かしいとも、つらいとも、いひやうもなかつた。

紫苑は引きこもつて誰にも、顔を見られたくなかつた。身の重さ、心のうつたうしさ、はじめてふだん見なれた比叡の山々が事もなく知らぬ顔をしてゐるのが、あまりに穏かすぎて見えた。山といひ、諸々の風景といひ、少しのかかはりのないありさまで居るのは、紫苑自身が一夜で変つて了つたことに原因があると気づいて、やうやくそれが不快な反景になつて来た。

兼家から後朝の歌には、今日の日の暮までの永い事、世をかけての思ひになみだもとどめることは出来ないと言つてきた。紫苑はそれをただ寧ろ茫然として見つめ、あはれにも、この今日の如何様にしても昏れるに永くかかることを、もろともに知つた。そして物思ひといふものが消してゆく時間が早い筈であるのに、けふの日は永く、しよせん、唏きすすつてゐるとしか思はれない私でございますと、返しの歌をおくつた。「思ふこと大井の川の夕ぐれは心にもあらず泣かれこそすれ」

三日めの朝、

夜明けのさえざえした表通りを往くのにも、心が一杯で、道の土さへ動いてみえるほど、夢中であつたと、兼家は書いた。「しののめにおきける空は思ほえであやしく露と消え返りつる」——あなたとお別れするといふことは、次ぎにまたお逢ひできるといふ結びを与へられるやうですと、兼家は婚意を固めた人をいたはつて認めた。

紫苑の返歌、

あなたは置く露にも消えたいお心でゐられますが、私はどのやうにお答へしてよいのでございませうか。その置く露よりも、もつと、あてに出来ないやうな私ですもの、あてのない方をあてにして往く私は、どのやうにしてずつと先、お目に懸れることやら、それを思ふことはなかなかの哀しみに思はれます。「定めなく消え返りつる露よりもそら頼めするわれは何なり」——

いつの間にか紫苑の上と呼ばれるやうになつてゐた彼女は、すこしづつ深く、兼家にかたむき、七月にはもうその結婚が成り立つてゐた。「越えわぶる逢坂よりも音に聞く勿来を難き関と知らなむ」——と、婚意を断つた紫苑であつたが、門前に兼家の供ぞろひを今はただ待つ身の、かそけき賑やかさを覚えてゐた。

あなたが私からお離れになるやうな日がございましたら、私は何をどのやうに申し上げたらよいかと、きぬぎぬに彼女は言ふやうになり、そのやうな言葉が自分から生れ出ることを、変りはてた女におもへた。文の机によることもなくなつたかはりに、終日思ひつづける兼家への慕ひは、誠

の男ではないと決めてかかつてゐても、やはりその容姿までが立ちどころに自分をとらへた。男の持つふしぎな幾らか嗅いでも足りることのない匂ひが、嘗て父倫寧の匂ひさへいやがつてゐたひとに、こんどは彼が去つたあとにとどめる匂ひにも、心惹かれてゐた。かぐはしとのみにあらず、いのちめく匂ひなりと彼女はやさしい思ひを劬つた。それらの日々は紫苑の上の蒼顔にあからみを加へ、頬のみねにはつやがさし昇つてきた。……

二、山辺の垣ほ

幾夜か過ぎ、また十日あまりも経つて、紫苑の上はかはりかけてゐる自らに気がついた。それは自らの時間といふものを失ひ、何時も空になつてゐる自らがただ夜といふものを待ち憧れてゐることだつた。永い昼のあかるさ、そこに漂うてゐる時間といふものが、すでに、紫苑の上のものでなくなつてゐる。何時も誰かが眼の中を往来して居て、そのものは決して放れることなしに、寧ろ紫苑の上自身がそれを放さずに縋つてゐる。さういふ縋つてゐる自身のあはれさがちらついてゐるからだ。わたくしとしたことが斯様にひとすぢに、自分の失くなるまでに考へ続けてゐるのは一たい誰のせゐなのであらう。誰の生き身がいままでにない日々の切ないものを与へ、それが紫苑の上の小さい動きにまで支配を続けてくるのだらうと、手を灑ぎ、頬をみがく少時のあひだにすら、それが彼の方の眼にはいる時の考へを捨てられないのは、いままでに一度として経験のないことであつた。胸にある新雪のやうなふくらみをみがくのも、紫苑の上自らのためであるより、彼の方のお眼の過ぎる希みがあるからでは、なかつたか。

わたくしはもう彼の方にみんなをおあげしてゐる。その上になほお上げするために毎日をこまかく砕いて、その遠い時間をまだ明るい間から待ち設けてゐる。お上げするものが余りに沢山にあり過ぎ、どれから先に上げていいか判らないくらゐであつた。几帳に髭の長い虫がとまつて鳴いたと申し上げれば、笑はれはすまいかと思ひ、仕へがこの頃お美しくおなりになつたと言つたことを申したら、どういふお顔をなされるであらう、端たない言葉としてこの考へは紫苑の上自らも捨てたいほどであつた。一日づつ美しくならなければならぬといふことが、いまは紫苑の上にみちてくる考へであつて、これより外に辿るみちはなかつた。美しいが上にもつと美しくなるといふ方法が一たい何処にあるのであらう。女のみんなが思ひをこめた一つのことが、多くの人の死と死を踏み躁え、言葉が言葉を連れて歩いて、いま紫苑の上自らにささやいてゐる。彼の方を惹きつけ、彼の方がひとめご覧になつたときに、昨日にも増してあでやかなものをお上げしなければならぬのだ、そればかりが女のすべてをほしがつたものであり、それが彼の方とわたくしをつなぎ合せる一つのものであつた。正妻の時

姫よりもわたくしは若い、それがために時姫の上に立たねばならぬ。時姫の笑ひはどうあらうと、わたくしの笑ひは彼の方の上に網のやうに温かくつつまねばならない、紫苑の上は笑ひを映して見て鏡の中で、ぎょつとして自分を省みた。

此処まで辿つて来て気のついたのも、僅かに二十日も過ぎた後にすぎない、その間に失つたものは誰にも品位をしめしてゐて、人には負けない気概と、自然の風物と常に一しよだつた気質のなごやかさであつたが、いま、それが崩れかけてゐることに気がついた。仕への女連の眼にまともに見られぬもののあることも、この日頃の気おくれであつた。殆ど何の色もなく物をいひ付けてゐた素気なさがなくなり、夜にいひつける白湯にも遠慮とたゆたひが持たれた。自らが小さくなり弱よわしくなり、びくびくすることを覚えたのも、朝になつて兼家が去るために衣裳を着ける間、さわさわ衣ずれの音に胸がいたんだ。胸がいたむといふ覚えははじめてであつたが、呼吸がしづかに逆になるほどの妙ないたみであつた。紫苑の上はかならずその朝ごとに言つた。

「けふの宵の程にも何卒いらつしやいますやうに、心づけることがございましたら、仰付けておいて頂けば致します。」

そして、時姫様にもよいやう仰せられますやうに、ことづけた。朝の早くに、兼家が衣裳を着ける前に紫苑の上も衣裳を着けはじめたが兼家は夜明けの白いただよひにこぼれる紫苑の上の、わづかばかりの身の露はれるのを見入るのがつねだつた。それをさうと心にとめる紫苑の上は、男といふものがそのやうな、みじかい時間に見入る女の身をどういふ心で、あのやうにめづらしく見入るかが判りかねてゐた。一日のわかれを惜しむために、ああは見入るのであらうか、それは同時に夜のしとねにはいる前に、衣裳を脱ぐときにも同様の凝視の物めづらしさが、何時もくりかへされてゐた。人間を褒めるための礼儀なのかしら、それとも、僅かな時間だから、つい惹きいれられてくるのかと思つてみたが、こまかい兼家の心は読み兼ねたのだ。しかしそれはただの眺めるとか見入るとかといふものではない、驚いて敬まふ肉体の美しさを思はず見入るそれであつた。紫苑の上はしとみの外のあかるさに羞らひ、身をつつんで、こぼれた肉体の部分に光が勢ひ切つて射すのを怖れた。

「少時、そのままにゐて下さい。」

兼家は眼につよい光をひそめた。

「なりませぬ、向うをおむきあそばせ。」

「卵は向うには見えぬ。」

「卵と仰せられますと……」

「お身がお持ちである沢山の卵のことでござる。」

「わたくしは其様な物は持つては居りませぬに。」

紫苑の上はまだ少女だつた。あちこち見廻して何鳥の卵があるかが判らなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.